様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：19520428
研究課題名（和文）　動詞由来接続表現の文法化についての対照言語学・社会言語学的観点からのコーパス研究
研究課題名（英文）　A Corpus-Based Study of Deverbal Links in English from a Comparative and Sociolinguistic Perspective

研究代表者
内田　充美（UCHIDA MITSUMI）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：70347475

研究成果の概要：接続詞や前置詞といった接続表現の中には，動詞から文法化したと考えられるものがある．その文法的要素としての地位は比較的柔軟なもので，今も動詞としての性格を強く留めているものもあれば，話者の心的態度を伝達するための手段としての新たな用法を確立しつつあるものもある．発達過程において深い関係のある英語とフランス語をとり上げて，動詞由来の接続表現が今日どのように用いられているのかを実証的な手段で明らかにした．

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1700000	510000	2210000
２００８年度	900000	270000	1170000
年度			
年度			
年度			
総　計	2600000	780000	3380000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：英語学，コーパス，文法化，フランス語

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究の位置づけ

本研究は 20 世紀中盤以降の現代英語とフランス語の資料を利用して，文法化仮説(Hopper and Traugott 1993 [2003], Traugott 1982, 1989, 1995a, and 1995b ほか）を検証しようとするものである．具体的研究対象として非定形動詞由来の節接続要素，なかでも，談話標識的な機能を持つことがあるような要素をとり上げる．

(2) 学問的背景

①文法化仮説

語彙要素から節接続要素への文法化では，parataxis > hypotaxis > subordination という一般的な変化の方向が提案されている(Hopper and Traugott 1993, 2003)が，同時に，非定形動詞由来の節接続要素の変化過程では指示的意味から非指示的（主観的）意味，さらに談話標識的な機能への移行が見られることが指摘されている．

②社会言語学分野での取り組み

いわゆる談話標識の用法については，社会言語学および関連性理論など語用論研究において最近さかんに研究されている

(Coates 2004, Holmes ら 2003; Blakemore 2002, Brinton 1996, Schiffrin 1987, Schourup 1999 ほか). しかし，社会言語学的研究においては研究者がそれぞれに収集した資料に基づく分析を行うのが一般的であり，関連性理論研究においては実際の言語使用資料に頼るよりもむしろ内省に基づく分析が主流である．いずれの方法も，信頼できる資料収集と分析が行われているという利点の半面，その資料は量的に限られたものであることが多い．そこから得られる分析も状況依存性が高く，再現性・追試可能性・一般性の点で問題がある．

③コーパスを用いた研究

研究代表者はすでに，非定形動詞から発達した接続詞や前置詞による接続表現に着目し，その意味・機能的特徴を詳細に追究してきた．理論的には文法化理論で提案されている仮説を検証するという立場をとってきた．再現性・追試可能性・一般性のある分析を行うという狙いのもと，一貫して言語使用の集積である既製の大規模コーパスデータを資料として用い，客観性のある検証を行ってきた．

(3) 準備状況

Uchida (2004)では，対照言語学的観点から, フランス語の接続表現 *y compris* と英語の *including* についての分析を，パラレルコーパスを用いて行った[対照言語学的比較]．Uchida (2005)では，非定形動詞から発達した接続詞や前置詞のうち英語の *except* と *including* について，LOB, FLOB, Brown, FROWN コーパスと WordbanksOnline の書きことば資料を用いた調査を行った．その結果, 20 世紀中盤以降に起きた用法の変化の傾向を指摘し [通時的変化の検証], より主観化が進んだと考えられる用法の使用頻度が，テキストのジャンルによって異なることを量的に実証した [共時的変異の検証]．Uchida (2006)と内田(2007) では, いわゆる談話標識を含む諸表現形式について，The British National Corpus (以下 BNC と記す) の話しことば資料を用いた量的調査を行い，状況要因による共時的変異を客観的方法で明らかにした．

これらの研究成果より，コーパスを利用した量的調査が共時的変異の検証と対象言語学的分析の究明に有効であるという見通しをつけることができた．同時に，1960 年代と 1990 年代の差異といった，比較的短い時間的スパンでも，言語変化の方向に一定の傾向が観察されることが示唆された．また，社会言語学分野での比較的小規模のデータに基づく先行研究が，必ずしも一般的な傾向を捉えてはいないのではないかということを示唆するような結果も得ることができた．

[引用文献]

Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

Brinton, L. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions.* Berlin: Mouton.

Coates, J. 2004. *Women, Men and Language: A Sociolinguistic Account of Gender Differences 3rd edition.* Harlow: Pearson Longman.

Holmes, J. and M. Meyerhoff (eds.) 2003. *The Handbook of Language and Gender.* Oxford: Blackwell

Hopper, P.J. and E.C. Traugott 1993 [2003] *Grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers.* Cambridge: Cambridge University Press.

Schourup, L.C. 1999. "Discourse Markers" *Lingua* 107: 227-265.

Traugott, E.C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meaning: Some Semantic-pragmatic Aspects of Grammaticalization" In W.P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics.* Amsterdam: John Benjamins.

___. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change" *Language* 65: 31-55.

___. 1995a. "Subjectification in Grammaticalisation" In D. Stein and S. Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives.* Cambridge: Cambridge University Press.

___. 1995b. "The Role of the Development of Discourse Markers in a Theory of Grammaticalization" Paper Presented at ICHL XII, Manchester (Version of 11/97).

Uchida, M. 2004. "Deverbal (Quasi-) Prepositions in English and French: With Special Reference to *Including* and *Y Compris* as Clause Linkers" *Proceedings of the 11th EURALEX International Congress, EURALEX 2004.* Volume II: 519-530. Lorient: Université de Bretagne Sud. 2004.

___. 2005. "Subjective Meanings of Except-linkage in Present-day English in Comparison with Including" In Y. Iyeiri (ed.) *Aspects of English Negation.* Amsterdam, New York: John Benjamins.

___. 2006. "Gender Preferential Variations in the BNC and Descriptions in

Dictionaries" in *English Lexicography in Japan*. Tokyo: Taishukan.
内田充美. 2007. 「BNC の話し言葉資料に見る性差: 女性・男性間発話構 成比率と「ていねい」表現の使用傾向」『言語文化学研究 英米言語文化編』第２号 105-120.

２．研究の目的

英語の通時的変化についての学問的関心は現代英語の成立までの期間に集中している．しかし言語は常に変化し続けるものであり，通時的変化は共時的変異なしには起こりえないものである．したがって，これまでの豊かな通時的研究成果をふまえて提唱されている文法化仮説を現代英語のさまざまなジャンルの資料で検証することには学術的意義がある．同時に，文法化仮説はあらゆる言語における変化を包括的に説明しようとする仮説であるため，関連するフランス語の表現について英仏パラレルコーパスを用いた調査・分析を行うことにも大きな意義がある．

社会言語学の分野で詳細な研究がさかんに行われている談話標識について，追試可能な方法を用いた客観的な調査は，社会言語学の研究成果の一般性を検証するという点において相補的な意義のある結果をもたらすことが予想される．

このように，通時的・社会言語学的・対照言語学的観点をとり入れることによって動詞由来の接続表現の現在の実態をとらえ，コーパス言語学だけでなく，これらの関連学術領域にも貢献することが本研究の主たる目的である．

通時的・社会言語学的・対照言語学的観点に立った時に，さらに考慮すべき点は，今日の英語が果たしている世界共通語としての役割であろう．フランス語圏において，共通語としての英語が急速に受容されていく現代（Cf. Nerrière 2004)という文脈での英仏語の対照研究という新たな研究テーマへの架け橋とすることも，目的のひとつである．

[引用文献]

Nerrière, J.-P. 2004 (2006). *Don't Speak English...: Parlez Globish! 2nd ed. Paris:* Eyrolles.

３．研究の方法

本研究において，調査の対象とした材料は主として，フランスの政治雑誌 *Le Monde Diplomatique*（以下 LMD と記す）の本文である．この雑誌の多言語版記事の本文は，同社が有償で配布している DVD に収められている．DVD には収録されていない記事数などの統計的資料については，LMD がインターネットのウェブサイト上で公開している情報を利用して，調査・分析を行った．

LMD 英語版が創刊されたのは 1996 年であるが，そこから今日に至る時期は，英語が世界の共通語としての地位を急速に強固にしてきた時期と一致している．長く英語の影響を拒み続けてきたフランスにおいても徐々に共通語としての英語が受け入れられてきた社会的背景を反映しているといえる．英語圏以外での英語の使用という観点から，LMD 英語版の記事について，その記事数の分布を図１に示す．他言語から英語に翻訳されたのではなく，もともと英語で書かれた記事の割合が，少ない年で 10%（1998 年），多い年では 27%（2006 年)に上っている．

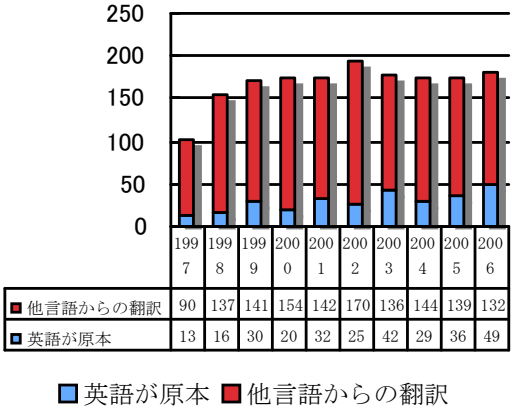

図１：*Le Monde Diplomatique* 英語版の記事内訳

これらの記事データを利用して，本研究が主な調査・考察対象としたのは，動詞に由来する接続表現のうち，特に「除外」を表すものである．具体的には，英語の前置詞 *except* で表されるような意味的関係である．現代フランス語では，英語の *saving [save]* にあたる *sauf* が最も一般的な接続表現として定着しているが，英語にもフランス語にも，同様の意味を表す表現形式が他にも存在する．

Uchida (2005) では，英語の *except* について BNC を用いた調査を行い，現代英語に見られる使用傾向が，文法化仮説で提案されている統語的制約の緩和と，論理的意味からテクスト構成的役割，さらに談話標識的な機能へと意味の拡張を見せているような用法があることを実証的に示した．本研究では，LBD の資料を用いて，同様の傾向がフランス語においても見られるかどうかを調査することを通して，あらゆる言語を対象として提案されている文法化仮説の検証を行っていく．

具体的方法としては，
① LMD の DVD に収録されている検索機能を用いて該当の接続形式の用例を網羅的に抽出
② その記事のオリジナル言語が何なのか，ほかのどの言語の版が存在するのかを調査
③ 対応する英語版，あるいはフランス語版の記事を読み，対応する接続がどのような表現を用いて表されているかを記録
④ その例において果たしている意味・機能の特定と，それにもとづく分類
⑤ 補語の統語的地位の特定と，それにもとづく分類
⑥ オリジナル版か翻訳版かという要因との関連の検証
以上６点に加えて，短い時間的スパンではあるが，
⑦ 上記の④⑤についての傾向に通時的変化が見られるか
も観察・考察の対象とした．

英語とフランス語の文章データを対照的に分析した結果，以下の点が明らかになった．
(1) 両言語オリジナル版での通時的傾向
英語の *except* が取る補語の統語的地位の分布を汎用コーパスを用いて調査したところ，基本的意味に対応する形式と，主観的意味に対応する形式との割合が 1960 年代と 1990 年代との間で目立った差が見られなかったのに対し，LMD のフランス語版のみがある記事を用いた *sauf* の調査では，1978 年から 1980 年の記事に比較して，1997 年から 2006 年の記事において主観的意味に対応する形式の比率が大きい（ 9% と 19%）．
(2) ２言語（オリジナルと翻訳版）の間の対応
①*except* と *sauf* は，その基本的意味においては，互いによく対応している．しかし，主観的意味を表す場合には，フランス語翻訳版では別の表現が用いられることがほとんである
② 英語に翻訳されているフランス語オリジナル版においても，主観的意味を表すようなタイプの *sauf* 接続はほとんど見られない

上記にあげた結果のうち，(1)と(2)は一見互いに矛盾する．フランス語版のみの資料では増加傾向を見せている用法が，翻訳という文脈においては，オリジナル版でも翻訳版でも避けられている，ということになる．
この点については，文体（スタイル）という観点からのさらなる考察が必要であろう．次の２点が，まず最初に予測される問題点である．
① 英語の *except* に比較して，フランス語の *sauf* はよりフォーマルな文体（スタイル）で用いられる表現である
② 調査において 1978 年ー1980 年の資料とした LMD には対応する英語版が全く存在しなかったため，「フランス語版のみが存在する記事」とは実質的にはすべての記事を指すのに対し，1997ー2006 年の資料では，英語の読者を想定しない記事だけが調査対象になっている

上記の２点を足がかりにして，一見矛盾をはらんだ調査結果に一貫性のある説明を行うことが次の課題である．

４．研究成果
フランス語圏における英語教育および英語使用の現況を知るための調査と意見交換を兼ねてベルギー，ルーヴァン大学を訪れ，コロキアムで成果を発表した．（2007 年９月）
LMD を用いた調査を進める中で明らかになってきた，汎用コーパス利用にもとづく研究の利点と問題点をまとめ，論文として発表した．（2009 年６月発刊予定）
英語の *except* とフランス語の対応表現についてのコーパス利用研究をまとめて，オーストラリア，シドニーでの国際学会で発表した．(2008 年 10 月)
LMD を用いて行った英語の *except* とフランス語の *sauf* についての研究を論文にまとめた．(2010 年３月発刊予定)

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
(1) Mitsumi Uchida "Exception Links in English-French Parallel Texts"『言語文化学研究英米言語文化編』第５号 査読なし 2010 年３月

〔学会発表〕（計　２件）
(1) Mitsumi Uchida "Exception Links in Egnlish-French Parallel Texts"
Free Linguistics Conference
2008 年 10 月 11 日
オーストラリア，シドニー大学

(2) Mitsumi Uchida "Evaluation of Written Texts by Japanese University Students: Is Comparison with French Equivalent Possible?"
Learner Corpus Colloquium
2007 年 9 月 10 日
ベルギー，ルーヴァン大学

〔図書〕（計　１件）
(1) 内田充美（分担執筆）　松柏社　『英語フィロロジーとコーパス研究』2009 年 総 580 頁 分担箇所 :「BNCの自然会話資料 : 幼児とテープレコーダーの「いる」日常」 pp. 317–330.

６．研究組織
(1)研究代表者
内田　充美（UCHIDA MITSUMI）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授